

わい性インゲン『ベストクroppシリーズ』の 紹介とその使い分け

雪印種苗(株) 北海道研究農場

松田 政志

1 はじめに

北海道のインゲンは道内消費はもとより、府県産のインゲンが品薄となる夏場に、本州方面へ移出されています。特に関西、中京市場においては道内産の丸莢インゲンが、莢色、形状、食味の点から高く評価され、嗜好性（関西、中京市場では丸莢のスムーズなものを好みます）ともあいまって夏秋期の占有率を5割以上に高めています。また、価格的にも他産地よりも有利に取り引きされ

その中で、当社のスノークroppネリナはさやの滑らかな曲がりの少ない、濃緑の高級インゲンとして丸莢の基幹品種とされており、関西市場で道産インゲンの地位を築くことに貢献してきました。ネリナは現在も市場の安定した評価と、作りやすさなどにより根強い人気を持っています。

当社としてもネリナよりもさらに高品質で、収益性のあがる品種開発を行っており、平成5年に

ベストクropp「キセラ」、平成9年にベストクropp「サマーキセラ」を発表致しました。以下に、昨年度から発売致しましたベストクropp「サマーキセラ」の紹介を中心にベストクropp「キセラ」との使い分け、栽培のポイントについて説明致します。

2 市場も高い評価を出した 『ベストクroppシリーズ』

ベストクroppシリーズの利点は15 cm以上のL規格の長さになっても、莢幅が6～7 mmと細く、凹凸が目立たず、美しい鮮緑色の高品質を保つことができる点です。従来の品種はSサイズの価格が最も高く、Mサイズ、Lサイズと大きくなるにしたがって価格が下がってしまいます（大型のインゲンは太く、種が肥大して硬くなっているという、イメージに原因があると思われます）。産地ではSサイズのインゲンを取り高値をねらいたいが、されど収量がのらない、収穫に手間がかか

表1 大阪市場におけるインゲンの産地別・月別入荷状況（平成8年）

	平成8年			6月			7月			8月			9月			10月		
	数量 (トン)	単価 (円/kg)	生産額 (千円)	数量 (トン)	単価 (円/kg)	構成比 (%)	数量 (トン)	単価 (円/kg)	構成比 (%)	数量 (トン)	単価 (円/kg)	構成比 (%)	数量 (トン)	単価 (円/kg)	構成比 (%)	数量 (トン)	単価 (円/kg)	構成比 (%)
総数	2,041	932	1,902,212	230	735		191	888		192	1,086		215	834		258	700	
熊本	301	1,127	339,227	62	904	27.0	10	1,034	5.2	0	633	0.0	13	1,210	6.0	66	933	25.6
北海道	241	1,258	303,178	0	2,472	0.0	28	1,583	14.7	110	1,348	57.3	86	1,124	40.0	16	788	6.2
鹿児島	226	832	188,032	30	562	13.0	0	529	0.0				5	699	2.3	30	685	11.6
高知	225	1,122	252,450	20	831	8.7	9	836	4.7	4	1,223	2.1	1	1,088	0.5	11	643	4.3
沖縄	178	1,100	195,800	0	773	0.0												
和歌山	94	645	60,630	20	698	8.7	10	623	5.2	3	635	1.6	10	543	4.7	20	530	7.8
長崎	90	696	62,640	13	780	5.7	1	792	0.5				8	444	3.7	42	729	16.3
徳島	76	755	57,380	10	952	4.3	27	847	14.1	7	659	3.6	10	735	4.7	12	523	4.7
長野	73	780	56,940	0	1,152	0.0	30	866	15.7	24	832	12.5	17	587	7.9	2	337	0.8
香川	72	472	33,984	41	410	17.8	1	485	0.5	1	567	0.5	2	615	0.9	1	492	0.4

大阪流通情報協会



写真1 サマーキセラ，莢長13cm程度で規格分けされ出荷される

るということからM，L中心の出荷を行っていることが多く、大きなジレンマを抱えていました。

ベストクロープシリーズはそれらの問題を改善し、関西、中京市場で高い評価を得ている新しいタイプのM，L取り専用の丸莢インゲンです。

3 道内で夏場の栽培に適したベストクロープ新品種『サマーキセラ』

サマーキセラは府県において暑さのため栽培することのできなかつた、夏場の作型に導入された耐暑性の強いインゲンです。市場ではキセラと同様にさやの形状、美しさからネリナ並みか、あるいはそれ以上の評価を得ています。道内でのサマーキセラは昨年度、一部の産地にテスト的に導入され好評を得ました。7，8月の温度の高い時期においてキセラよりも曲がり、奇形莢が少なく選別が容易で、さやの太りが遅く収穫に追れないなどの結果を得ました(写真1)。

1) 早晚性

- ネリナよりやや遅く、キセラと同じ中生種です。
- 播種から60～62日程度の間で収穫期に達します。

2) 草姿

- 草丈は露地栽培で55cm前後、ハウス栽培で60cm前後となり、ネリナやキセラよりやや低めとなります。
- 分枝はキセラ同様にネリナよりやや多めです。
- 葉は小さめで濃緑色です。



写真2 サマーキセラ，細く，スリムなさや

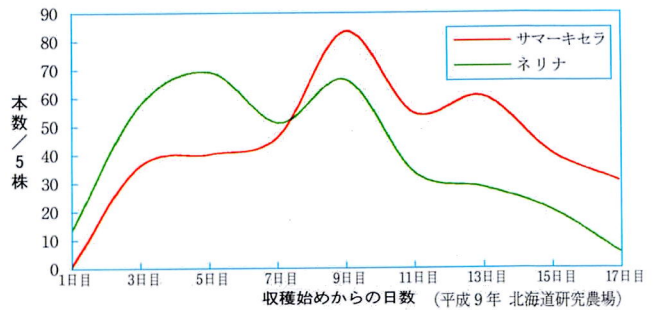


図1 サマーキセラとネリナの日毎の収穫本数パターン

3) さや

- 形状はキセラと同様にネリナよりさらに細く、スリムです(写真2)。
- さやの太りはネリナより遅く、またキセラよりもやや遅く凹凸も目立たないので、取り遅れによる劣化は少ない傾向にあります。
- 莢色はネリナよりやや濃緑色で照りがあります。

4) 収量性

- さやが細いため、小さめで収穫してしまうと一莢重が軽くなりますが、M，Lサイズの収穫を徹底すると、莢数の多さからネリナよりやや多収となります。
- 曲がりさや、奇形莢の発生がキセラやネリナより少ないので、規格内収量が高くなります。特に、夏場の栽培においてはその傾向は顕著です。
- ネリナよりも、より後期多収型の品種です(図1)。

4 道内にける『サマーキセラ』と『キセラ』の使い分け(図2)

1) 5月上旬～6月播種のハウス、雨よけ栽培ではサマーキセラが特性発揮。

インゲンの生育適温は、15℃～25℃で開花期に

品 種	ハウス 4月～ 5月上旬 播 種	ハウス (雨よけ) 5月上旬 ～7月 播 種	露 地 マルチ 5月中～ 播 種	露 地 マルチ 6月上～ 播 種	露 地	長期収穫	一斉収穫
サマーキセラ	△	◎	○	◎	△	○	◎
キセラ	○	○	○	○	△	◎	○
ネリナ	○	○	○	○	○	○	△

◎：最適 ○：適する △：やや適する

図2 サマーキセラとキセラの使い分け(北海道)

表2 品種比較試験

(北海道研究農場)

品 種	規 格 内							規格内 収 量 (kg/a)
	開花期 (月日)	英色 (9～1)	曲がり (9～1)	くびれ (9～1)	莢長 (cm)	莢幅 (cm)	一本重 (g)	
(ハウス栽培 播種期 平成9年5月13日 収穫期 7/14～8/2 計10回)								
サマーキセラ	7/1	7.0	6.7	7.0	14.9	0.6	3.3	86.1
キセラ	6/30	7.0	5.6	6.7	15.2	0.6	3.5	61.3
ネリナ	6/28	6.8	6.3	5.8	13.2	0.7	3.6	88.6
(ハウス栽培 播種期 平成8年5月21日 収穫期 7/29～8/12 計7回)								
サマーキセラ	7/19	7.1	6.7	7.3	13.8	0.5	2.6	80.9
キセラ	7/19	6.9	5.6	7.3	14.0	0.6	3.4	52.7
ネリナ	7/19	6.7	6.1	7.0	12.2	0.6	2.8	52.9
(露地マルチ栽培 播種期 平成7年6月1日 収穫期 8/1～8/19 計7回)								
サマーキセラ	7/16	7.8	6.3	7.9	13.8	0.6	2.7	80.4
キセラ	7/16	8.0	6.5	7.8	14.1	0.6	3.3	66.8
ネリナ	7/14	7.8	6.1	6.6	12.4	0.7	2.8	78.8

評点基準 英色：9(濃緑色)～1(淡緑色)、曲がり：9(無)～1(甚大)、くびれ：9(無)～1(多)

*夏場の栽培においてはサマーキセラが品質、収量とも良好です。

表3 キセラ播種期試験

(北海道研究農場)

品 種	規 格 内							規格内 上物率 収 量 (kg/a)
	開花期 (月日)	英色 (9～1)	曲がり (9～1)	くびれ (9～1)	莢長 (cm)	莢幅 (cm)	一本重 (g)	
(ハウス栽培 播種期 平成7年5月8日 収穫 計8回)								
キセラ	6/26	7.3	5.9	7.9	14.8	0.6	3.0	73.1
(ハウス栽培 播種期 平成7年7月3日 収穫 計13回)								
キセラ	8/7	7.9	6.2	7.7	14.4	0.6	3.5	46.9
サマーキセラ	8/7	7.4	6.6	8.0	14.6	0.6	3.1	81.4

評点基準 英色：9(濃緑色)～1(淡緑色)、曲がり：9(無)～1(甚大)、くびれ：9(無)～1(多)

く夏場に安心して作ることができます。また、特性的に曲がりさやが少ない品種なので関西、中京市場で道内産のインゲンがメインとなる8月、9月に、より曲がりさやの少ない品質良好なインゲンを市場に送ることができます(表2、写真3)。

2) 春先の4月～5月上旬播種はキセラが良好

生育初期に低温となる作型にはキセラをお薦めします。キセラは初期生育時にやや低温条件にあっても、草勢が抑えられることが少なく、収量を確保しやすい品種です(表3)。

3) 長期収穫ならキセラが有利

灌水、追肥、摘葉等の管理をまめに行うことにより、キセラは他の品種以上に長期間収穫することが可能になります。

4) 一斉収穫ならサマーキセラが有利

収穫作業の効率化を図るため株を刈取り作業室等でさやを摘み、調整を行う一斉収穫の検討が各産地で行われています。サマーキセラはさやの肥大が遅いため、収穫適期幅が他の品種より広く、また、一番花の着莢数も多く、規格内率が高いことから一斉収穫用として適応できます。品質良好で、収量性が高い時期は、開花後26日程度でこの期間が一斉収穫の目安になります。

5 栽培のポイント

1) 発芽の安定とスタンドの確保

播種は、発芽を良好にして欠株を防ぎ、収穫できる株数を確保するための重要な作業で、良品の安定多収のための第一歩です。初夏～夏場にかけての播種、特にマルチ栽培においては高温、過湿による種子の腐敗、立ち枯れが目立ちます。種子には殺菌剤を粉衣し、発芽不良を防止します。

スタンドについては株数の確保と共に、生育を揃えることも良品の生産につながるため、1株2～3粒播きとし、間引き時に健全かつ生育の揃った株を、基本的には1本残すようにします。また、育苗による移植栽培もスタンド確保の点から有効

30℃以上の高温になると、着莢率の低下や受粉障害による曲がりさや、奇形莢の発生が多くなります。

北海道の夏場が、いくら冷涼でインゲン栽培に適しているといっても、7月下旬～8月にかけてのハウス栽培や、雨よけ栽培では高温にさらされる機会が多くなります。サマーキセラはキセラに比べ高温によるさやの曲がり、奇形がほとんどな

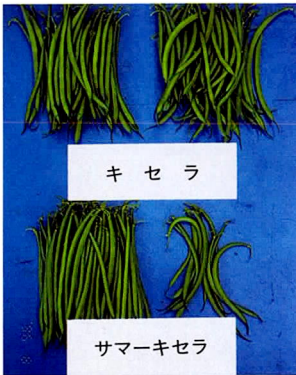


写真3
サマーキセラ（試作系統名SB2011）
夏場の栽培においても曲がりさや、奇形莢が少ない（8月4日収穫）。



写真4
マルチの中に灌水チューブを通して、開花期以降はまめに灌水します。

です。

2) ハウス、マルチ栽培で高品質、多収を目指す

温度、水分コントロールしやすい、ハウス栽培やマルチ栽培がお勧めです。低温期においては樹勢を確保しやすいハウス栽培が有利ですし、また、夏場の栽培においても雨にさらされない雨よけ栽培により、きれいなさやを収穫することができます。露地栽培においてもマルチを張り灌水チューブを通すことにより、水の管理が可能となり収量が安定します。また、泥のはねかえりも少ないため品質も良好です（写真4）。

3) 草勢の確保

サマーキセラはキセラに比べて草丈が低くややおとなしい草勢なので、収量確保の点からやや強めに生育させることがポイントとなります。

地力のある圃場での作付け、こまめな灌水や追肥により順調な生育を心がけます。また、曲がりさや、奇形莢を収穫せずに放置しておくことで過剰に養分を吸収してしまい、樹のバランスをくずし草勢が衰えてしまいますので、大莢にすることなく、さやを取り続けることが大切です。

4) 支柱を立てて倒伏を防ぐ



写真5
支柱を立て、ひもを張り風や収穫作業による倒伏、折損を防ぎます。

サマーキセラ、キセラとも樹の割に着莢数が多く、分枝にも多く着莢するため、収穫期に入ってから倒伏したり、株元から折損する可能性があります。

倒伏についてはネリナ以上に注意が必要であり、開花前の早い時期に支柱を立て、ひもを張り補強をしてやります（写真5）。

5) 莢長 13 cm 以上での収穫

サマーキセラ、キセラはM、L取り専用の品種ですので、長さが13 cm以上に伸長したさやを収穫するようにします。10~12 cmで収穫してしまいますとさやが細く、一莢重がのりません。また日持ちの点からも、しおれやすくなり商品価値が下がりますのでM、L取りを徹底してください。また、出荷の際は品質基準（病虫害、腐敗、過熟、曲がり等が入らない）を守り、規格分けを徹底することにより、産地として高い評価を得ることとなります。

6 おわりに

道内のインゲン栽培は生産者の高齢化に伴って減少傾向にあります。他の野菜がやや供給過剰の傾向の中で、安定した消費が見込まれており、市場から要望の強い作物の一つとなっています。

特に、府県で生産することが困難な夏季には、北海道産のインゲンは重要となり益々の出荷が期待されています。当社としてもより消費者のニーズにあった、付加価値の高い品種開発を目指しており、本品種が生産者の方々の生産意欲を高め、栽培面積の拡大につながることを願っています。